

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 加地 大介

英米分析哲学は論理実証主義の歴史的背景のもと、長らく「形而上学」と敵対的、あるいは疎遠な関係にあったが、近年の分析形而上学の目覚ましい展開は、様相論を基盤に伝統的な形而上学・存在論の問題を再考する新たな地平を開きつつある。日本で当該分野を牽引してきた加地大介の博士号申請論文は、これまでの成果を総合的な理論にまとめ上げることで「<もの>とは何か」という哲学の問いに挑んだ意欲的な研究である。主要な目論見は、形而上学の創始者アリストテレスの「実体」カテゴリーを基礎に位置づけて現代的な「実体主義」を構築し、4種の形而上学的様相（類種様相、本質様相、力能様相、持続様相）からその存在論を明らかにする点にある。

論文は本論の全6章と、応用問題を扱った2章の付論からなる。第1章と第2章は「もの」を形而上学的に特徴づける「実体様相」の概要を示し、その特徴を哲学的な視野で検討する。冒頭に提示される「形而上学的構想の全体図」では、4種の実体様相が「本質・力能」のペアと、「過去・未来」のペアで区別され、それぞれに様相論理の枠組みから説明が加えられる見通しが与えられる。つづく第3章から第5章では、「本質、力能、持続」という実体様相それぞれの源泉について、現代の分析哲学者たちの立場を批判的に検討しながら、論理学・存在論的な解明が加えられる。とりわけこの主題で議論を先導してきたJ. ロウの定義的本質主義に修正を加えつつ、アリストテレス的な質料形相論を取り入れる「力能的統一性」の考えを提案する。さらに、潜在的性質としての力能という概念を精緻化し、共同体や個体外に拡張する。持続の考察では「プロセス論理」という論理体系を提示し、その特徴を検討する。こうして進められた考察は第6章でまとめられ、「もの」を實在とする実体様相が、個性・因果性・時間性の基盤となるという、実体主義形而上学が示される。

口頭審査では、独自の用語や規定ゆえに難解さがある点が指摘され、趣旨をめぐって議論が交わされた。現代最先端の理論をさらに精緻に仕上げながら、伝統的なアリストテレスの「もの＝実体」の存在論へと回帰する試みであるだけに、様々な立場から批判や疑問も提起される。この試みはさらに発展させるべき議論の枠組みとして、今後継続されることが確認された。また、量子論と相対論を扱った付論も高く評価された。なお、本論文は単著として2018年12月に春秋社より刊行されている。

分析形而上学の分野で、日本で初めて本格的になされた独創的研究として、本論文が提起した問題射程と分析は、今後研究者たちの礎となるはずである。審査委員会は、本論文を高く評価し、博士（文学）の学位授与に相応しい業績と判断する。